

北京の初夏は白楊（ドロヤナギ）の綿毛が街に舞う季節だ。かつての北京の通勤手段は自転車、自動車の数は少なく大気汚染とは無縁だった。私にとっての天安門通りは常宿の日航ホテルからの気持ちの良い朝の散歩コースだった。

当時は白楊の綿毛が空に舞うのが初夏の風物詩だったが、いまの北京といえどPM2.5や黄砂やスモッグがあるのに更に花粉症（北京でも花粉症はある）にも気を遣わないといけないのかと心配するほど大気汚染が進んでいる。

年に何度か来ている北京だが、最近は大気汚染がひどくてあまり来る気にもならなかった。今年の冬は特にPM2.5の騒ぎで外出禁止令が出るほどで、日本の空気清浄機が飛ぶように売れたらしい。確かに北京の大気汚染は深刻なのだが、米国外務省が数年前から公表し始めたPM2.5の発表がインパクトを与えたことも事実で、海外のメディアの騒ぎ方も度を越している感もあった。

突如出現した 北京の百万本のバラ

中国でも流行ったロシアの「百万本のバラの花」という歌があるが、今年の11月までに北京に行けばそれが見られる。といえ「何のことだ？」と訝しく思われるかもしれない。実は、今回の短期出張で空港から街に向かう途中のハイウェイの中央分離

AROUND THE WORLD

山師の手帳 第19回 中村繁夫

もはや隠蔽は無理 「和諧社会」目指す中国

帯に、色とりどりの薔薇の花が途切れることなく咲き誇っているのを見た。

どうやら北京政府は世界的に有名になった環境汚染のイメージを払拭するために「百万本のバラ作戦」に出たのかもしれない。北京市園林緑化局は、市内に薔薇の木だけでも数百万本は植栽したといわれるが、今年北京で園博会（国際園林博覧会）の大イベントも行われている（写真）。

日本風には「国際花と緑の博覧会」である。そのために北京郊外の267畝の荒地を大造成した。中国はやるのが何でも大きい投資規模はおおよそ100億元（約1635億円）に上り、北京のイメージを良くするために躍起になっているように見える。

ただ、いえることは中国政府が北京の環境改善に並々ならぬ努力をしていることである。車の増加を抑えるために登録許可証に抽選制を導入し、車の価格以上のプレミアアがついたくらいだ。また、中国の各地では、環境に対する抗議デモが多発している。例えば、昆明市や寧波市の石油化学工場の建設反対の抗議運動が連日の国内ニュースで騒がしい。ひと昔前なら人民政府は、一方的に抗議デモの解散を命じていた。ところが、最近ではインターネットによる情報



公開も手伝って、無視することが出来なくなった。習近平体制になってから、経済発展と環境のバランスがとれた「和諧社会」を目指すという目標に向けて、真剣に取り組み始めたように見える。贅沢宴会の禁止や賄賂役人の処分、安全食品対策。それに加えて、ガソリン車から電気自動車への奨励策や、都市近郊にある化学工場の移転など、環境対策が習近平政治の目玉になっている。

中国は共産党一党独裁の国家であると言われるが、良いところはいったん政策が決定すると一気に実行されるところである。地方のレアメタル工場を視察しても、当局の監視体制は強化されていると実感させられる。欧州や日本のような環境大国になるには時間がかかるだろうが、社会の価値観や環境変化と共に中国が今までは違った社会を目指しているように感じる。

このところ、人件費の高騰によって中国から脱出する日系企業が出てきているが、同じように環境コストの増加にも直面することになる。

〔なかむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（A.M.J.）社長。新著に『レアメタルハンター・中村繁夫のあなたの仕事を成功に導く「山師の兵法A to Z」』（ウェッジ）。